

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K01867

研究課題名(和文) 乳幼児期の象徴化を生み出す分離と言葉に関する臨床心理学的研究

研究課題名(英文) Clinical psychological research on separation and language that create symbolization of infancy

研究代表者

黒川 嘉子 (Kurokawa, Yoshiko)

奈良女子大学・生活環境科学系・准教授

研究者番号：40346094

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、前言語段階から言語段階への過渡期にあらわれる完全に象徴的なものになる前の乳幼児期に特有のことばについて、「移行対象としての言葉」の観点から研究をおこなった。保育園・幼稚園および療育機関を利用している乳幼児の保護者を対象に調査をおこなった結果、言葉の意味の伝達や理解とは異なる、身体感覚を伴う音の響きによって原初的な無様式知覚による「他者と共にいる」関係を可能にしていることが見出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって得られた「移行対象としての言葉」の基礎的データは、音の響きによる身体性の共有や、その子どもと養育者や家族だけのprivateな言葉として大切にされるなど、乳幼児期の言語発達だけでなく他者との関係性や象徴化のプロセスについて新たな視点を見出すことにつながった。これは、再接近期危機や発達特性による育てにくさなど、1歳半健診後から2歳代にかけて養育者の不安が高まる時期における子育て支援や発達支援に活かしていくことができる観点になった。

研究成果の概要(英文)： In this study, we studied words peculiar to infancy before they become completely symbolic, which appear during the transition from the prelinguistic stage to the language stage, from the viewpoint of "language as a transition object". As a result of a survey of parents of infants and toddlers using nursery schools, kindergartens, and rehabilitation institutions, it was found that the relationship of "being with others" is possible by primitive atypical perception by the sound of sounds accompanied by physical sensations, which is different from the transmission and understanding of the meaning of words.

研究分野：臨床心理学

キーワード：乳幼児のことば 移行対象 象徴化 発達障害 プレイセラピー 乳幼児心理臨床

### 1. 研究開始当初の背景

乳幼児の心理臨床において、「言葉」をめぐる問題は大きなテーマである。たとえば、発語や言語発達の遅れでも、問題の質や程度、背景は多様であり、場面緘黙や吃音、音声チックなど、「物語る」ことに困難を抱える子どももいる。また、DSM-5(2013)による自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder) において、言葉の有無ではなく、情緒的、社会的相互関係や非言語的コミュニケーションの障害が診断基準として明記され、前言語的関わり合いの次元が焦点になっている。つまり、前言語段階から言語段階への過渡期におけることばの特性や情緒的社会的相互関係についての質的吟味をおこなうことが、1歳半健診等で、言葉の遅れを指摘されるものの、どの程度問題としてとらえたらよいかかわからず、不安を抱えたまま「魔の2歳児 terrible two」と言われる再接近期危機を孕む時期を過ごす養育者と子どもの支援につながることを考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究は、前言語段階から言語段階への過渡期にあらわれる完全に象徴的なものになる前の言葉である“移行対象としての言葉”(Stern,1985/1989, Dolto,1984/1994)の実態をとらえ、音の響きという特性をもち、魔術的な対象物となることや、まだうまく使えない語のうちでたとえ意味不明であっても、主体が直感的に感じた自分をまるごと表現できるものになることについて明らかにする。そのために、移行対象概念で示されている就眠時や離乳など分離のプロセス、生気情動など前言語段階での体験をとらえる身体感覚をとまなうことば、移行対象が位置する中間領域における遊びやプレイセラピーにおけることばの3つの観点から検討する。

### 3. 研究の方法

対象：保育園、幼稚園、子育て支援事業および療育機関を利用している乳幼児と保護者

方法：質問紙調査およびインタビュー調査

### 4. 研究成果

#### (1)音感性の移行対象としての言葉

226名(男児107名、女児119名、年齢平均3:7)を対象とした調査より、「不思議な言葉」というキーワードで、47.7%の保護者から回答を得た。言葉の意味内容を共有できないものの、不思議な響きや意味のわからないことばに心をとめる保護者の感受性と、子ども自身が「ことば」を作り出し、自分のものとして使う姿が見いだされた。

収集された「ことば」は、①音を繰り返す(例：ぶりらぶりら)、②決まったフレーズを唱える(例：かまみんだー)、③その子なりの気持ちや要求を表す(例：テン!)、④その子どもなりのモノの名称(例：耳かきを“いーこっこ”)、⑤音の類似のある名称や動作を表す(例：たまご“ががご”、食べる“ぺぺる”)、⑥人形や愛着物(見えない存在含む)への命名(眠たい時に出てくる妖精“たれおぼうちゃん”)に分類された。これは、jargon→有意味語→一語文→命名期という言語発達のプロセスと①から⑥の分類が一致する。ただし、jargonは1歳半頃がピークとされるが、呪文のような「ことば」はむしろ1歳後半からその子どもにとって大切な自分を落ち着かせる(soothingする)ものになっている。また、音位転換による言い間違えが、その子どもと保護者(家族)だけに通じる特別な「ことば」となり、正しく言えるようになった後も使われていることもあるなど、愛着ある「ことば」となっている。

これまで、Stern(1985/1989)やDolto(1984/1994)によって述べられていた「移行対象としての言葉」が、実際に、乳幼児期の子どものにとって、正確な言葉ではないからこそ、その子どもにとって音の響きが特別な所有物という感覚を可能にしていることが示され、基礎的データとして学術的意義のあるものとなった。

#### (2)分離のプロセスと言葉

上記の質問紙調査に回答した保護者のうち11名の母親(幼稚園6名、療育機関5名)にインタビュー調査をおこなった。離乳のプロセスを検討したところ、F.Dolto(1984/1994)が母子間の短絡的回路である身体接触の関係が象徴化されて、長い迂回する回路に変換される過程である述べているように、母親と子どもとの身体的距離と情緒的距離のあいだで、言葉がどのように象徴的機能を果たしていくのかという重要な局面であることが示唆された。子どもの側からは、生後1年間ほどをかけて前言語段階から初語が出て、言語的関わり合いの領域へと入っていくが、養育者の側からみると、乳児がまだ言葉を話していないときから、まだ胎内にいるときを含め、多くの言葉をかけている。つまり、情緒的応答性(Emde,1983/1988)など双方向性を重んじながらも、母親が感じる“ひとりで演じているような”体験があることが示唆された。これは、子どもの他者と共有できる言葉が増えることを期待して待つ背景として着目できることである。ま

た、身体的な直接的つながりを、身体感覚をともなう音の響きが特徴的な音感性の移行対象が、身体的に分離した関係への橋渡しとして機能していることも考察された。

### (3)遊ぶことと話すこと

プレイセラピー事例研究をおこなった。プレイセラピーにおけるおもちゃは、子どもにとっては言葉のように用いられるものであり (Landreth,2012/2014)、同じプレイルームで同じおもちゃが備えられている中でも、子どもによって全く異なる体験が創り出される。移行対象としての言葉を検討する中で示された、完全に象徴化する前の言葉も、「自分のもの」として、その子ども独自の体験を創り出す。ただし、その「自分のもの」も、他者と意味を共有できるという社会につながる性質を有していることが、移行対象概念 (Winnicott,1953) における実在性 *actuality* の重要性として理解することができる。おもちゃのもつ実在性は、意味を共有する他者 (セラピスト) との間で可能となり、子ども独自の体験も可能となるという逆説性を含んでいる。

自閉症スペクトラム児のプレイセラピーは、二次障害へのアプローチとして位置づけられることが多いが、自分なりのおもちゃの使用を通して創り出す独自の体験を、映し返す他者としてのセラピストと共有され、その遊びが展開していく。これによって、前象徴的段階から象徴化していくプロセスとなり、自身を物語る (話す) ようになることが示され、象徴機能の発達に寄与することが示唆された。

これまでの研究データの総合的検討から特に言葉のもつ音の機能について検討した。乳幼児期の相互作用におけるコミュニオン調律 (Stern,1985) や音の回路によって共振する *sympathy* (内海,2015) の重要性が明らかになり、意味の伝達や理解ではなく、内的体験の共有やただ共にあること (*being*) にかかわる言葉の機能が、乳幼児心理臨床や発達障害の心理臨床に有効であることが示された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 黒川嘉子	4. 巻 45 (6)
2. 論文標題 プレイセラピー（遊戯療法）におけるactuality	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 精神療法	6. 最初と最後の頁 61-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒川嘉子	4. 巻 9
2. 論文標題 「発達障害」用語の揺れ幅について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 奈良女子大学心理臨床研究	6. 最初と最後の頁 23-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 黒川嘉子	4. 巻 7
2. 論文標題 離乳のプロセスにおける喪失と象徴化 - 乳幼児をもつ母親にとっての「言葉」 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 奈良女子大学心理臨床研究	6. 最初と最後の頁 25-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 黒川嘉子	4. 巻 6
2. 論文標題 表情を感じる体験世界 人との関係性・ものとの関係性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 奈良女子大学心理臨床研究	6. 最初と最後の頁 19-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒川嘉子	4. 巻 4
2. 論文標題 子どもの「ことば」にみる音の響きと身体性	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 奈良女子大学心理臨床研究	6. 最初と最後の頁 9-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 黒川嘉子
2. 発表標題 発達障碍児のプレイセラピー
3. 学会等名 日本遊戯療法学会第21回研修会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 黒川嘉子
2. 発表標題 移行対象としての言葉：象徴機能の発達における「ゆらぎ」とその意義
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会，ラウンドテーブル
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 黒川嘉子
2. 発表標題 乳幼児の言葉にみる音感性の移行対象 移行対象としての言葉をとらえる試み
3. 学会等名 日本心理臨床学会第37回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------